

最期まで自宅で過ごすことを決めた、Kさんのこと

この 11 月、長くかかわっていた利用者さん(88才)がご自宅で亡くなられた。5 月に退院され、一人暮らしだが最期までご自宅で過ごされることを決め、この半年間ケアマネジャーを中心に訪問医療、訪問看護と連携し 10 名以上のヘルパーで支えてきた。

出会いは 20 年も前になる。緊張気味の新人ヘルパーを穏やかな笑顔で迎えてくださった。足浴や調理から始まった。台所にそろっている調理道具はプロ仕様、教会のバザーではパウンドケーキを焼いて好評だったそうだ。料理だけでなく、ご自身のコートから夏のスーツまで作り、和洋裁、手芸、手仕事万端極めていた。二階には編みかけのタティングレースが広がっていた。友人たちも、衣食に関するたくさんのごことを教わりに集まってきては、楽しい時間を過ごしていた。パソコンはレシピや写真、年賀状作りにも使っていた。デイサービスでは将棋に出会い、本を買って学ぶ。新聞も毎日目を通し、「ね、これ読んだ? ひどいわね」と社会問題にも関心が高い方だった。制度改定の影響でご自分の介護度が下がった時には、国会集会で「進行する病気で悪くなっているのに、なぜ?」と国会議員の前で堂々と意見を述べられたそうだ。

ご自身は、若いころからリウマチを患って関節の痛みと戦っていた。すでに膝や股関節の手術もされていたがご本人は詳細は語らず、その時点で必要なケアは何か相談しながら提供し、生活を支えた。症状の進行に伴って、買い物、入浴介助と増え、ケアしながらおしゃべりする時間も増えた。

「何かに夢中になっていると痛みも忘れるの」。そこが原動力なのはつらいが、いつも笑顔で楽しんでおられたのも事実。ほんとうにたくさんのごことを教わった。衣・食・趣味・感性にも影響を受けた。ケアの知識と心構え、自立支援とは何か、も。

(ケアサポートえん／石井美佐子)

